

一三世紀前半における教皇の対ムワッヒド朝政策

尾崎 秀夫

はじめに

中世西ヨーロッパは、カトリック・キリスト教社会である。それは洗礼を受け、カトリックの信仰を受け入れる者だけからなる社会であった。従って、それを受け入れない者は含まれず、他者と見なされた。^①中世のキリスト教社会を理解するためには、その内部の検討だけでなく、外部に対する態度の検討も必要であろう。

では、キリスト教社会は、外部の最大の脅威であるイスラム世界に対して、どのように対応したのであろうか。もともと、外部への対応にもさまざまなレヴェルがある。王や封建貴族などの世俗君主の対応もあれば、商人の対応もある。しかし、キリスト教社会の外部への対応を検討するには、その社会の頂点にたち、主導権を握るローマ教皇の対応を看過することはできない。

教皇のイスラム世界への対応としてまず想起されるのは、十字軍などの軍事的対応である。周知の通り、十字軍は一一世紀後半に開始されたが、これがもっとも盛んになったのは、一三世紀前半ということができる。C・モリスは、一三世紀前半を「十字軍の黄金時代」と呼んでいる。^②実際、一一八七年のサラディンによるエルサレム占領後、ほぼ一〇年に一度の割合で十字軍が東地中海方面へ出発し、イベリア半島のレコンキスタもバレンシアやセビリアを征服するなど大きな成果をあげた。^③またこの時期に、教皇は十字軍士の特権を拡大・明確化し、十字軍税などによって資金を確保するなど、十字軍の組織化を進めた。^④

しかし、一三世紀前半に、教皇がイスラム世界に対する敵意を強め、常にイスラム世界に対して問答無用の敵対的態度をとり続けていたわけではない。この時期には托鉢修道会を中心に布教活動が開始され、教皇もそれを支持した。^⑤また、教皇は一三世紀前

半にイスラム世界と多少とも恒常的に使節を交換していた。ルッブリアンが編纂した書簡集によると、インノケンティウス三世からインノケンティウス四世にいたるこの時期に、教皇からアイヌーブ朝やルーム・セルジューク朝、ムワッヒド朝などのムスリム君主に送られた書簡が二四通、ムスリム君主から教皇に送られた書簡が一〇通残っている。^⑧しかし、これらの書簡は、教皇とモンゴルの支配者との間で交わされた書簡に比べて、これまでほとんど検討されてこなかった。^⑦これらの書簡には、教皇のイスラム世界に対するいかなる態度が表れているのであろうか。本稿は、これらの書簡を手がかりとして、教皇のイスラム世界に対する対応の一面を考察する、ささやかな試みである。

本稿では、一三世紀前半における教皇の、ムワッヒド朝のカリフとの交渉を検討する。その理由は、この時期の主要な四人の教皇がムワッヒド朝に送った書簡が五通とムワッヒド朝からの返書が一通残っており、多少とも継続的にこの関係をたどることができるところである。また、一三世紀前半にイベリア半島から撤退してレコンキスタの対象外となったムワッヒド朝に対する態度の中に、教皇のイスラム国家への対応の新たな側面が見いだされると考えるからである。

教皇とムワッヒド朝との交渉は、これまであまり注目を引いて

こなかった。出発点となったのは、一九世紀半ばにL・マス・ラトリが編纂した史料集である。その後、一九二六年にE・ティッスランとG・ヴィエトが論文を発表し、ムワッヒド朝カリフ、アル・ムルタダから教皇インノケンティウス四世へのアラビア語で書かれた書簡をフランス語に翻訳して、それが書かれた状況を解説した。^⑨しかし、これはインノケンティウス四世とアル・ムルタダの関係だけを扱ったもので、この交渉を一三世紀前半における教皇とムワッヒド朝の交渉の中に位置づけるものではなかった。

一九七九年には、J・マルドゥーンが『教皇、法学者、異教徒』を著してこの交渉に言及した。^⑩これは、中世後期における教皇と異教徒との関係を、理論と政策の両面から検討したものである。

その中で、彼は、インノケンティウス四世を重視し、この教皇が異教徒の支配権を正当とした最初の教会法学者であることを指摘し、彼の対異教徒政策はその理論に基づくものであり、ムワッヒド朝との交渉においてムスリム王朝との平和的關係を承認していた、と主張する。だが、インノケンティウス四世の対ムワッヒド朝政策は以前の教皇の政策を継承するものであるとし、教皇の対ムワッヒド政策の連続性を主張する。このような連続性は、そのほかの歴史家にも承認されている。K・E・ルッブリアンは一九八一年に一三世紀の教皇がイスラムやモンゴルの君主と交わした

書簡を集めた、先述の史料集を出版したが、それにつけられた簡潔な解説でも教皇たちの対ムワッヒド政策の変化は述べられていない。一九九三年に出版された概説『キリスト教史』の第五巻でこの問題に言及したA・ヴォンシェも、教皇の対ムワッヒド政策を連続的にとらえている。^①

このように、これまでの研究では一三世前半にムワッヒド朝との交渉が存在したことが問題となるだけで、教皇による態度の相違は看過されてきた。しかし筆者は、この交渉に教皇のムワッヒド朝に対する態度の変化が認められる、と考える。マルドゥーンは、彼自身が中世教会法の専門家ということもあって、ムワッヒド朝をめぐる政治情勢をまったく考慮に入れず、教皇の書簡のみをもとにして考察したため、またルップリアンやヴォンシェは概説的に述べただけで、詳細な検討をしていないために、この変化が見逃がされているのである。一三世前半にムワッヒド朝をめぐる状況が変化する中で教皇のムワッヒド朝に対する態度は変化する。そこにはまた、一三世紀に現れた異教徒に対する新しい態度の一端も示されているのである。

以下において、教皇の政策の変化をより明確にするため、一三世前半の対ムワッヒド政策を、インノケンティウス三世とホノリウス三世、グレゴリウス九世、インノケンティウス四世の三つ

の時期に分けて考察し、政治情勢の変化の中でのそれぞれの教皇の対応の特性を明らかにしたいと思う。

- ① E. R. Daniel, *The Franciscan Concept of Mission in the High Middle Ages*, Kentucky 1975, pp. 2-3.
 ② C. Morris, *The Papal Monarchy: The Western Church from 1050 to 1250*, Oxford 1989, p. 478.

- ③ A. Mackay, *Spain in the Middle Ages*, London 1977, pp. 58-60.

- ④ J. A. Brundage, *Medieval Canon Law and the Crusader*, Madison 1969, p. 192. 八塚春児「インノケンティウス三世と第四回十字軍」『史林』五八、一九七五年、六六一-六七頁。

- ⑤ 布教にこころを尽す J. Richard, *La papauté et les missions d'Orient au moyen âge (XIII^e-XIV^e siècles)*, Rome 1977 (= *Papauté*), pp. 33-47; C. H. Lawrence, *The Friars*, London 1994, pp. 202-204. 十字軍と布教活動の関係については P. A. スローン「以来、これを対立的にとらえる見解が通説となっていた」。P. A. Throop, *Criticism of the Crusade*, Amsterdam 1940, rep. Philadelphia 1975, p. 288. しかし、一九八〇年代に十字軍と布教は補完的であり、両立し得るとする反論が現れた。E. Siberry, "Missionaries and Crusaders, 1095-1274: Opponents or Allies?," *Studies in Church History* 20 (1983); B. Kedar, *Crusade and Mission: European Approaches toward the Muslims*, Princeton 1984. キリスも補完的にとらえる見解を支持している。C. Morris, *op. cit.*, p. 486. 筆者もこれに賛成であるが、このころ教皇からムスリム君主にキリスト教の教義を説明し、改宗を勧める書簡が送られるのは、教皇のイスラム世界に対する態度

の變化のひとりの表れてゐる」と考へる。

⑧ K. E. Lupprian, *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihres Briefwechsels*, Città del Vaticano 1981.

⑨ *Ibid.*, pp. 10-13.

⑩ L. Mas Latrie, *Traité de paix et de commerce et documents divers concernant les relations des Chrétiens avec les Arabes de l'Afrique Septentrionale au moyen âge*, vol. 1, Paris 1886, rep. New York 1966.

⑪ E. Tisserant et G. Wief, "Une Lettre de l'Almohade Murraqā au Pape Innocent IV," *Hespéris* 6 (1926).

⑫ J. Muldoon, *Popes, Lawyers, and Infidels: The Church and the Non-Christian World 1250-1550* Philadelphia 1979, pp. 6-14.

⑬ K. E. Lupprian, *op. cit.*

⑭ A. Vaucher, "Les Chrétiens face aux Non-Chrétiens," in *Histoire du Christianisme* 5, Desclée 1933, p. 729.

一 インノケンティウス三世、

ホノリウス三世とムワッヒド朝

キリスト教徒とイスラム教徒が共存していたイベリア半島では、一一世紀に宗教的不寛容の時代が始まる。サハラ砂漠から興つたベルベル人のムラービト朝は、急速に勢力を拡大して、一〇八四年にはモロッコ地方を抑え、その二年後にイベリア半島に渡つてアンダルス地方を征服した。強烈な宗教運動から発展したこの王

朝のもとで、キリスト教徒に対する聖戦意識が高揚したのである。これを減ぼしたムワッヒド朝も、この意識を継承した。カリフ、アブド・アル・ムーミンはキリスト教徒を強制的に改宗させ、従わない者を虐殺した、という。これによつて古代以来のマグリブ（現在のチュニジア以西の北アフリカ）のキリスト教徒共同体は断絶し、以後のマグリブのキリスト教徒は外来者、すなわち商人、傭兵、戦争捕虜を含む奴隸となつた。^①

他方、キリスト教世界でもムスリムに対する聖戦意識が現れる。一〇六三年、教皇アレクサンデル二世はイスラム教徒を討つためにスペインに赴く者に聖ペトロの旗を与えて祝福した。マグリブに対しても一〇八七年に、地中海でキリスト教徒を襲うチュニジアのズィール朝に対し、教皇ヴィクトル三世はピサとジェノヴァに教皇庁の旗を授けてマフディーヤ攻撃を承認した。そして一〇九五年、ウルバヌス二世はクレルモン教会会議で聖地への第一回十字軍を提唱するのである。このように、イスラム世界とキリスト教世界の双方で宗教的不寛容の精神が高揚し、一二世紀末に至るまで、教皇とムワッヒド朝カリフとの交信はまったくなかった。教皇がはじめてムワッヒド朝に書簡を送るのは、一二世紀末である。一一九九年三月八日に、教皇インノケンティウス三世がムワッヒド朝カリフ、アル・ナーシルに宛てて書簡を送っている。^②

この書簡は、それを届ける三位一体修道会士をカリフに推薦し、彼らがキリスト教徒の捕虜とイスラム教徒の捕虜の交換、あるいは金銭によるキリスト教徒の捕虜の解放を目的とする者であることを知らせるものである。捕虜がキリスト教を守れず、背教者が増えたため、このような運動が起こったのだが、その成果の程は明確ではない^④。

このような交渉の開始は、教皇とムワッヒド朝との関係改善を示しているであろうか。そのようなことは決して言えないであろう。なぜなら、捕虜の交換あるいは買い戻しは、敵対する者同士でも行われるからである。また、当時ムワッヒド朝はイベリア半島の南部に広大な領土を持っており、レコンキスタの対象であった。実際、インノケンティウス三世は一二〇四年のアラゴン王ベドロ二世への書簡で、マジョルカ島を征服して勢力を拡大したムワッヒド朝のアル・ナーシルと戦うよう提案し、一二一〇、一一一年にはキリスト教徒が一致してスペインのムスリムに対抗するよう呼びかけ、翌年十字軍を宣言している。他方、アル・ナーシルも聖戦を宣言し、一二一一年にジブラルタル海峡を渡った。翌一二一二年、キリスト教諸国連合軍は、アル・ナーシル自らが率いるムワッヒド軍をラス・ナバス・デ・トロサの戦いで粉砕^⑦、教皇は祝福の書簡をカステイリャ王アルフォンソ八世に送っている^⑧。

すなわち、インノケンティウス三世の交渉は、ムワッヒド朝に対する態度の変化を示すものではないのである。

ラス・ナバスの戦いは、ムワッヒド朝衰退の最初の兆候であったが、アル・ナーシルの後継者ユースフ二世アル・ムスタンシールの時代はまだ平静を保ち、イベリア半島の領土も確保することができた。このユースフ二世へ、ホノリウス三世が一二一九年に書簡を送っている^⑨。これは、ユースフの支配下にいるキリスト教徒に礼拝の自由を許すようカリフに求めるものである。ムワッヒド朝においてキリスト教は禁じられていたわけではなく、私的な礼拝のみ許されていたが、ホノリウスは完全な礼拝の自由を与えるよう要請するのである。この書簡を託されたのは、その後イスラム世界への使者として活躍する托鉢修道士ではなく、ヨハネ騎士団員ゴンサルウスであった。この教皇の要請は無視されたようである。一二二三年にホノリウスがモロッコの信徒に送った書簡から、金曜日や四旬節にキリスト教の教えに反して王とともに肉を食べることを、王がキリスト教徒に強制したことが知られるからである^⑩。

しかし、その後ホノリウスはマグリブのキリスト教徒に大いに関心を持ち、モロッコでのドミニコ会とフランチェスコ会の活動を積極的に支持している。彼らの活動はムスリムに対する布教よ

りも、むしろマグリブのキリスト教徒の司牧に重点が置かれていた、と見るべきであろう。教皇もムスリムへの布教に触れながらも、マグリブのキリスト教徒に対して活動することを彼らに求めている。一二二五年六月一日、ホノリウスはモロッコに向かうドミニコ会士とフランチェスコ会士に書簡を送り、説教し、改宗したサラセン人に洗礼を授けるよう求めるとともに、背教者と和解し、贖罪を科し、赦免をえるために教皇庁に來られない破門者を赦免し、異端者と判断した者を破門する権限を与えている^⑪。そのころ、長期の司教不在の後、モロッコの王国の司教となったドミニクスへの一〇月二七日の書簡では、改心させるべき不信心者呼び戻すべき背教者、励ますべき信仰弱き者、強めるべき信徒のために、自分自身を犠牲にし、信徒を呼び戻し、他の者を神の助けによって信徒の群れへと導くために、異教徒の地を駆け回っている、と彼を賞賛している^⑫。モロッコで活動するドミニコ会士バイルスに送った十一月八日の書簡では、彼の活動を賞賛しながら、モロッコのキリスト教徒の中で働くよう励ましている^⑬。翌年の二月二〇日にはトレド大司教に、ドミニコ会士とフランチェスコ会士をモロッコに派遣し、そこでいく人かの司教を叙階するよう命じているが、それはモロッコのキリスト教徒の捕虜が処罰と死の恐怖のために背教していると聞くからであり、またキリスト教徒

の司牧活動が不足しているから、と述べている^⑭。さらに、三月七日の書簡では、モロッコで托鉢修道士たちが頸髯や頭髪をやし、金銭を受け取ることを許しているが、それは人々の乱暴を避け、牢獄のキリスト教徒を訪問し、信徒に贖罪を科し、適切な忠告を与え、秘跡が行えるため、であった^⑮。

このようにホノリウスは、ムワッヒド朝のカリフに書簡を送るとともに、モロッコに托鉢修道士を送ってその地のキリスト教徒のために配慮した。しかし、彼がムワッヒド朝と新しい関係を結ぼうとしていたとは考えられない。なぜなら当時なおイベリア半島南部を支配していたムワッヒド朝に対するレコンキスタを、ホノリウスも積極的に支持しているからである。たとえば、一二一八年一月三〇日にスペインの高位聖職者に、サラセン人と戦うため教皇特使に任命されたトレド大司教に従うよう命じている^⑯。一二一九年二月九日のトレド大司教への書簡では、スペインのムーア人と戦うために、トレドとセゴビアの司教区で徴収された、通常聖地のために用いられる二〇分の一税の半分を用いることを許している^⑰。一二一九年三月一日、一二二〇年一月一日、一二二二年六月一日、一二二五年九月二六日の書簡では、ムーア人と戦う者に全贖宥を認めている^⑱。

ホノリウスの時代に教皇庁のモロッコとの関係は深まった。し

しかし、それはモロッコのキリスト教徒との関係であり、マルドゥーンが言うようなモロッコの支配者との関係ではなかった。ムワッヒド朝とはイベリア半島で戦わねばならず、対立関係を解消することは不可能であった。従って、ムワッヒド朝との間に一定の平和的關係を結ぶことはできなかった。それ故、ホノリウスはキリスト教信仰の自由の要請をそのような関係に基づかせることができず、先の書簡でもキリスト教徒の支配下ではイスラムの信仰の自由が許されているとして、要請するしかなかったのである。

しかし、そのような要請をカリフが聞き届けることは期待できない。ムワッヒド朝でのキリスト教信仰の自由を確保するためには、キリスト教世界とムワッヒド朝の新しい関係と、教皇のイスマム國家に対する新しい態度が必要であった。

- ① 私市正年「イスラームの地中海」(佐藤次高、鈴木善禧編『都市の文明 イスラーム』講談社現代新書、一九九三年)。Ibn Khaldun, *Histoire des Berbères et des dynasties musulmanes de l'Afrique septentrionale par Ibn Khaldun vol. II*, trad. par M. Baron de Slane, Alger 1854, pp. 76-84, pp. 161-196; H. W. Hazard, "Moslem North Africa, 1049-1394," in: ed. by K. M. Setton, *A History of the Crusades III*, Madison 1975, p. 488; Ch. Courtois, "Grégoire VIII et l'Afrique du Nord: Remarques sur les communautés chrétiennes d'Afrique au XI siècle," *Revue historique* 195 (1945), p. 121; K. E. Lapprian, *op. cit.*, pp. 18-19; R. Le Tourneau, *The*

Abolished Movement in North Africa in the Twelfth and Thirteenth Centuries, Princeton 1969, pp. 57-58; A. MacKay, *op. cit.*, p. 29.

② C. Morris, *op. cit.*, pp. 143-153; H. W. Hazard, *op. cit.*, pp. 465-467; Ch. Courtois, *op. cit.*, p. 224.

③ L. Mas Latrie, *op. cit.*, pp. 8-9 VIII; D. Mansilla, *La documentación pontificia hasta Inocencio III (965-1216)*, Roma 1955 (= *Inocencio III*), p. 198 n. 192; K. E. Lapprian, *op. cit.*, pp. 105-107 Nr. 1; A. Pothast, *Regesta Pontificum, Romanorum*, vol. I, n. 619. エズ・ネトリーは誤ってこの書簡の日付を一一九八年としてゐる。

④ J. リンチャールは、捕虜の買戻しは必ずしも容易ではなかったと云ふ。J. Richard, *Papauté*, pp. 39-40. ネムンリマンは、三柱一体修道会の活動はかなりの成果をあげたことは確かである、と云ふ。K. L. Lapprian, *op. cit.*, p. 20. 三柱一体修道会について G. Cippolone, "L'Ordre de la Sainte Trinité et de la rédemption des captifs (1198): Les Trinitaires dans le Midi," in: *Islam et chrétiens du Midi (XIIe-XIVe s.)*, Toulouse 1983.

⑤ D. Mansilla, *Inocencio III*, pp. 329-330 n. 295; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 2127.

⑥ D. Mansilla, *Inocencio III*, p. 436 n. 416, pp. 475-476 n. 447, p. 476 n. 448, pp. 497-498 n. 468, pp. 500-501 nos. 470-1; J. Sayers, *Innocent III: Leader of Europe 1198-1216*, London 1994, p. 178.

⑦ Ibn Khaldun, *op. cit.*, pp. 224-226; A. MacKay, *op. cit.*, pp. 33-35; R. Le Tourneau, *op. cit.*, p. 83.

⑧ D. Mansilla, *Inocencio III*, pp. 519-521 n. 488.

⑨ D. Mansilla, *La documentación pontificia de Honorio III (1216*

-1227), Roma 1965 (= *Honorio III*), pp. 184-185 n. 243; K. F. Luppian, *op. cit.*, Nr. 5; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 6121.

⑨ D. Mansilla, *Honorio III*, pp. 444-445 n. 590.

⑩ *Ibid.*, pp. 416-417 n. 582; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 7429.

⑪ D. Mansilla, *Honorio III*, pp. 442-443 n. 588.

⑫ *Ibid.*, pp. 444-445 n. 590.

⑬ *Ibid.*, pp. 450-452 n. 595; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 7537.

⑭ D. Mansilla, *Honorio III*, pp. 452-453 n. 596; I. Mas Latrie, *op. cit.*, p. 9 IX; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 7550.

⑮ D. Mansilla, *Honorio III*, pp. 119-120 n. 148.

⑯ *Ibid.*, pp. 160-161 n. 207.

⑰ *Ibid.*, pp. 161-162 n. 209, p. 251 n. 339, pp. 298-299 n. 404.

⑱ J. Muldoon, *op. cit.*, p. 39.

二 グレゴリウス九世とムワッヒド朝

一二二四年のユースフ二世の死後、ムワッヒド朝は急速に衰退する。① イベリア半島ではレコンキスタが進展、ムルシアとグラナダではムスリムの王国が建設され、マグリブでもチュニスを中心にハフス朝、トレムセンを中心にザイヤーン朝、フェスを中心にマリーン朝が成立してムワッヒド朝から分離した。ムワッヒド朝のイベリア半島からの後退は、教皇庁との関係を変化させることになる。

ムワッヒド朝の王家でも内紛が起こる。一二二七年には、ア

ル・ナーシルの弟アル・マームーンがイベリア半島でカリフに推される一方、ムワッヒド朝の都マラケシュではユースフの弟ヤフヤー・アル・ムタシムがカリフと宣言される。アル・マームーンは、スメイインの一〇の要塞と交換にカステイリヤ王フェルナンド三世からキリスト教徒の兵士を得てヤフヤーを破り、一二三〇年にマラケシュに入る。アル・マームーンはムワッヒド教義とその創始者イブン・トゥーマルトの無謬性を否定するとともに、キリスト教徒に寛容を示し、マラケシュに教会をたて、鐘を鳴らすことを許して公的な礼拝を許可し、ムスリムがキリスト教に改宗することさえ認めた、という。しかし、ムワッヒド教義の否定は帝国の解体に拍車をかけた。ハフス家のアブー・ザッカーリヤーはアル・マームーンをカリフと認めず、ヤフヤーに忠誠を誓った。

一二三二年にアル・マームーンがセウタを包囲していたとき、ヤフヤーはマラケシュを奪回して、キリスト教徒を虐殺し、教会を破壊した。アル・マームーンは急ぎマラケシュに戻ろうとしたが、その途中で死去する。その跡を継いだ子のアッラシードはムワッヒド教義を復活させたが、混乱は続き、以後もキリスト教徒の傭兵を用いてヤフヤーやマリーン族と争わねばならなかった。②

このような状況の変化の中で、教皇のムワッヒド朝に対する対応も変化する。マルドゥーンはホノリウス三世時代とグレゴリウ

ス九世時代における教皇とムワッヒド朝の関係を、それが深まった時代として一括しているが、筆者はそこに大きな変化を認めねばならないと考える。ムワッヒド朝はレコンキスタの対象ではなくなつたため、グレゴリウスはもはやムワッヒド朝に対する戦争を提唱することはないからである。

また、グレゴリウス九世は、ムスリムのキリスト教への改宗を積極的に推進しようとした教皇であつた。彼は一二三三年に、アッラシードとダマスクス、コニヤ、カイロ、アレppoの سلطان、アッバース朝のカリフに、キリスト教の教義を説いて改宗を勧め、使者であるフランチェスコ会士の説明に耳を傾けるよう要請する長文の書簡を送っている。④他方、一般のムスリムへの布教をも積極的に奨励している。一二三五年には、布教活動についての基本的宣言を含む大勅書「クム・ホラ・ウンデキヤ Cum hora undecima」を発している。⑤その中で、宣教師の任務はすべての人に福音を伝えよとのキリストの命令を果たすことであるとされ、彼らは信仰の弱いキリスト教徒を強め、異端者の誤つた教説を正し、未信者をキリスト教徒の群れに導かねばならない、とされる。ムスリムなど異教徒の地に赴く宣教師は、異教徒の改宗とともに、その地のキリスト教徒の信仰を強めることも任務とされている。グレゴリウスがムスリムへの布教に積極的であつたことは、一二

三八年の大勅書で、聖地で戦うことと異教徒を改宗させることを同等とし、聖地に向かう宣教師に十字軍士と同様の贖宥を与えたことからもうかがえる。⑥

では、グレゴリウスはムワッヒド朝に対してどのような態度で臨み、それとどのような関係を結ぼうと考えたのであろうか。先述のグレゴリウスの書簡は、もっぱらキリスト教の教義の説明と改宗の勧告に終始するものであるが、アッラシードにはその翌日にさらに書簡を送り、再度キリスト教への改宗を強く勧め、フランチェスコ会士とくにフェス司教アニエッロに従うよう願っている。そして、この書簡は「もし、あなたがキリストの友であるより、敵であることを選ぶなら、私はキリストの信徒たちがあなたに仕えることを決して許さないし、許すべきでもない」と結ばれている。この言葉は、グレゴリウスがムワッヒド朝との関係をどのように考えていたかを知る上で、きわめて重要なものである。

「キリストの敵」とは何を意味するのであろうか。マス・ラトリはこの箇所を「もし、キリストの友であることをやめるなら」と解釈している。⑧ムスリムであるカリフが「キリストの友」であるとするのであるから、マス・ラトリは「キリストの敵」をキリスト教徒の迫害者と考えている、と思われる。ルツプリアンは、「カリフがキリストの敵であり続けるなら、教皇はもはやキリス

ト教徒がカリフに仕えることを許すことはできない」としている。^⑨
すなわち、彼は「キリストの敵」を異教徒と解釈するのである。
ヴォンシェも、改宗要請を拒否したならキリスト教徒の傭兵を退去
させる、としている。^⑩ 筆者は、ルツプリアンやヴォンシェ同様、
「キリストの敵」は異教徒を指す、と考える。なぜなら、迫害者
にキリスト教徒が仕えないのは、教皇の命令に関係なく、当然だ
からである。また一二三七年のモロッコのキリスト教徒への書簡
で、モロッコの「教会が『キリストの敵』の中に置かれている」
と書かれているが、ここでは明らかに異教徒を意味している、と
考えられるからである。マス・ラトリもこれについては「キリス
トを認めない人々」と解釈している。つまり、「キリストの敵」
とは異教徒を指し、先の書簡の末尾でグレゴリウスは、カリフが
これまでのようなキリスト教に対する寛容策をとったとしても、
キリスト教に改宗しないなら、キリスト教徒がカリフに仕えるこ
とを禁じる、と言っているのである。すなわち、非キリスト教徒
の君主にキリスト教徒が仕えるべきではない、と主張しているの
である。これほどに強硬な要求が出されたのは、グレゴリウスが
ムスリムの改宗を強力に推進しようとした教皇であるとともに、
アッラシードにはキリスト教徒の傭兵が必要であることを知って
いたためであろう。これに対するアッラシードの返答は知られて

いない。マルドゥーンは、モロッコの支配者も教皇庁との関係に
無関心であったわけではないとして、一二三五年に教皇に二人の
ジェノヴァ商人を使者として派遣してきたことを指摘しているが、^⑪
二人の使者を派遣したのはモロッコの君主ではなく、ムワッヒド
朝から独立していたチュニジアのハフス朝君主アブー・ザッカリ
ーヤーであった。ここでも、マルドゥーンがマグリブの情勢をま
ったく考慮していないことが窺える。

アッラシードはもちろん改宗の要求に耳を傾けなかった。一方、
グレゴリウスは脅しを実行せず、結局先の書簡はカリフとその支
配下のキリスト教徒との関係を悪化させることはなかったよう
である。教皇は、一二三七年のモロッコのキリスト教徒への先述の
書簡で、モロッコでの教会の状態に満足を表明し、キリストの敵
の中にいる彼らの司牧のために、アニエツロをマラケシュ司教に
叙階している。^⑫ グレゴリウスは、改宗しないカリフに対して強引
な措置はとらず、モロッコのキリスト教徒の安全と司牧を優先し
たのである。

ムワッヒド朝との交渉において、グレゴリウス九世は強く改宗
を迫り、キリスト教に改宗しないなら、キリスト教徒が王に仕え
ることを禁じるという強硬な態度をとった。それはムワッヒド朝
が困難に陥っており、またキリスト教徒の兵士を必要としていた

ためであろう。しかし、彼はあまりに楽観的すぎた。教皇のこのような態度は、ムワッヒド朝にはとうてい受け入れられないものではなかった。当時のムワッヒド朝では、カリフ自身がキリスト教徒を迫害したり、宗教生活を妨害することはなかった。しかし、私的な迫害の可能性は常にあったため、モロッコのキリスト教徒の安全を確保するためには、カリフの保護が必要であった。だが、カリフにキリスト教への改宗を迫るグレゴリウスの態度は、受け入れられるものではなく、そのような態度ではキリスト教徒の保護を確保することはできなかつた。改宗を前提としない、カリフとの新たな関係を認めることが、保護を確保するための必要条件なのである。

① W. Hazard, *op. cit.*, pp. 469-470; E. Tisserant et G. Wiet, *op. cit.*, pp. 48-49. モリス・ハザードの著、『L'Église chrétienne de Marrakech au XIII^e siècle』, *Hesperis* 7 (1927), pp. 73-80; R. Le Tourneau, *op. cit.*, p. 92 ff.; C. J. Bishko, "The Spanish and Portuguese Reconquest, 1094-1492," in: by K. M. Setton, *A History of the Crusades III*, Madison 1975, pp. 424-432; N. Levinson, "The Western Maghrib and Sudan," in: ed. by Roland Oliver, *The Cambridge History of Africa vol. 3 from c. 1050 to c. 1600*, Cambridge 1977, p. 345. オ・サイヤの『アラブと北アフリカの歴史』、『アラブの統合』(余部信三訳)、D・T・ロビンソン編『モリス・ロビンソン』(同朋舎出版、一九九二年)七二一―七五頁。

② Ibn Khaldoun, *op. cit.*, pp. 229-243, p. 299; R. Le Tourneau, *op. cit.*, pp. 94-99; H. Miranda, "El reinado del califa almohade al-Rasid, hijo de al-Ma'mun," *Hesperis* 41 (1945), pp. 9-45.

③ J. Muldoon, *op. cit.*, p. 39.

④ K. E. Lupprian, *op. cit.*, pp. 120-125 Nr. 7, p. 123 Nr. 8-10, p. 124 Nr. 11-12; C. Rodenberg, *Epistolar s. XIII e Regesta Pontificum Romanorum Selectae I, Monumenta Germaniae Historica*, Berlin 1883, pp. 410-412 n. 512, pp. 422-423 n. 527; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, nos. 8784, 9083; J. Richard, *Papauté*, p. 44. キリスト教の教義を説明する書簡を教皇がムスリム君主に送ったそれ以前のものと比べて、アレクサンデル三世がルノー・セルジック朝のメンタンの求めに応じて送付した書簡が挙げられる。P. L. CCVII, 1069-1078; P. A. Thoop, *op. cit.*, p. 93. キリスト教の例やアレクサンデル三世がルノー・セルジック朝のメンタンの要求に応じて送付した書簡の例がある。K. E. Lupprian, *op. cit.*, pp. 206-208 Nr. 38. ルノー・セルジック朝の書簡に比べて、メンタンの改宗の準備ができたことを教皇に伝えた。』J. Richard, *Papauté*, pp. 45-46. ルノー・セルジック朝の書簡を教皇に送ったのは、『L'Église chrétienne de Marrakech au XIII^e siècle』, p. 46. ルノー・セルジック朝の書簡に比べて、キリスト教の教義の伝達を深めることは興味深い問題である。』今後の課題としたい。

⑤ J. Muldoon, *op. cit.*, pp. 36-37; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, nos. 9845, 9846.

⑥ B. Kedar, *op. cit.*, p. 142, p. 213 Appendix 2/b; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 10525.

⑦ "...si forte Christi hostis esse malueris quam amicus, nul-

latenus patlemur, sicut nec pati debemus, quod tibi a suis fidelibus serviatur." K.E. Lupprian, *op. cit.*, pp. 128-129 Nr. 13; C. Rodenberg, *op. cit.*, p. 423 n. 528; L. Mas Latrue, *op. cit.*, p. 10 X; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 9207.

⑧ L. Mas Latrue, *op. cit.*, p. 10 X.

⑨ K.E. Lupprian, *op. cit.*, p. 128.

⑩ A. Vauchez, *op. cit.*, p. 729.

⑪ "... ecclesia praedicta inter hostes Christi posita ..." L. Mas Latrue, *op. cit.*, p. 12.

⑫ J. Muldoon, *op. cit.*, p. 39.

⑬ L. Mas Latrue, *op. cit.*, pp. 11-12 XII; A. Pothast, *op. cit.*, vol. I, n. 10403.

三 インノケンティウス四世とムワッヒド朝

インノケンティウス四世は高名な教会法学者シニバルド・フィエスキであり、グレゴリウス九世が編纂を命じた『教皇令集』の注釈書を残している。その中の教皇令「クオド・スバル・ヒス ^①Quod super his」の注釈で、彼は「異教徒との関係について重要な発言を行っている。それについて筆者は別稿で検討したことがあるので、ここでは簡単に述べるとどめたい。 ^②

彼は、異教徒の支配権を正当とし、それ故に理由なく異教徒を攻撃することを否定した最初の教会法学者であった。彼以前においても、理由なく異教徒を攻撃すべきでないことは教会法学にお

いて一般に承認されていたが、それはそのような行為がキリスト教徒にふさわしくないためとされ、異教徒に何らかの権利が認められているためではなかった。他方、彼は教皇のすべての人に対する「法的な de jure」権力を主張し、通常は異教徒社会に介入できないが、いくつかの状況下で介入できると主張する。ひとつには、異教徒がキリスト教徒から不正に奪った聖地を回復する戦争を起こすことができる。また、異教徒が自然法に違反している場合、異教徒がキリスト教の宣教師を受け入れない場合、異教徒の支配者が支配下のキリスト教徒を不正に苦しめる場合、教皇が訓戒してなおそれを改めないなら、教皇によってキリスト教徒の世俗君主に彼らに対する戦争が命じられる。 ^③

彼の理論には二つの側面が認められる。すなわち、異教徒の支配権を認める側面と、特定のケースにおけるキリスト教徒による異教徒攻撃を承認する側面である。では、このような理論を提唱するインノケンティウスは、ムワッヒド朝に対してどのような態度で臨むのであろうか。

インノケンティウス四世の書簡の中でマグリップのムスリム君主が初めて現れるのは、一二四五年のサンチャゴ騎士団に宛てた書簡である。 ^④その書簡によると、サレのムスリム君主が受洗を希望し、領土を騎士団に譲ると言っているという報告を受けた教皇は、

その地方が近隣の布教の拠点となり、そこから聖地をより効果的に支援することができるとして、騎士団による領土の受領を承認した。このムスリム君主はマリーン朝からの独立をめざし、キリスト教勢力の支援を期待したのであろうか。詳細はわからない。

この書簡は一二七〇年のルイ九世の十字軍がチュニスに向かった理由としてジョフロワ・ド・ボリーユールが挙げるチュニスのアミールの改宗希望を想起させるが、チュニスのアミール同様、サレの君主も受洗することはなかった。この書簡はインノケンティウスもグレゴリウス同様、ムスリム君主の改宗の可能性を信じ、期待していたことを示している。

しかし、インノケンティウスはグレゴリウスほど楽観的ではなかった。彼はムワッヒド朝のカリフに改宗の圧力をかけるようなことはせず、ムワッヒド朝との関係を重視してキリスト教徒の礼拝の自由と安全を図ろうとする。

ムワッヒド朝では、アッラシードを継いだアッサイドのもとで帝国の再建が図られたが、彼が一二四八年に殺害されると、衰退は決定的となった。カリフとなったアル・ムルタダはもはやマラケシュ近辺においてかろうじて権力を維持しているだけであった。^⑤

次に、インノケンティウスのムワッヒド朝との交渉をたどるこ

とによって、彼の態度を考察したい。彼は一二四六年にマグリブにかんするさまざまな措置を行っている。まず、一〇月にフランチェスコ会士ロベ・フェルナンデス・デ・アインをマラケシュの新司教に任命した。^⑥ ロベは、アラゴン出身のフランチェスコ会士で、教皇グレゴリウス九世にも信任されていた。一二四三年にインノケンティウス四世が教皇に選出されたとき、ロベは教皇庁にあり、教皇がイタリヤを離れてリヨンに移る際にはこれに従った。新マラケシュ司教は、フランチェスコ会の重要人物で、教皇の信頼する側近であった。

インノケンティウスはロベを司教に任命した後、アラゴン、ナバラ、カスティリヤ、ポルトガルの諸王、フランチェスコ会、サンチャゴ騎士修道会、各地の大司教や司教、聖堂参事会、スペインのキリスト教徒に、ロベを助け、彼に従うよう要請するとともに、モロッコの信徒、北アフリカのすべての信徒に宛てた書簡をおくり、ロベを新司教として受け入れ、彼に従うよう命じている。^⑦ このように、インノケンティウスはロベの任務を重視し、ロベにはマグリブ全体における宗教上の裁判権が与えられた。

また、チュニス、セウタ、ブージュの王たちに同文の書簡を認めている。^⑧ 書簡は、彼らの支配下で多くのキリスト教徒が商業を営んでいるが、聖職者がおらず、司牧活動が行われていないので、

マラケシュ司教ロベとフランチェスコ会士を受け入れ、自由に滞在することを許すよう願うものである。この書簡では、キリスト教の教義を説いたり、改宗を勧告したりはしていない。インノケンティウスは、ムスリムの改宗よりマグリブのキリスト教徒の司牧を優先し、それを修道士たちの重要な任務と考えていた。

教皇はムワッヒド朝のカリフに一二四六年一〇月三十一日付きの書簡を書いている。この書簡を託されたロベは、一二四八年以降にアフリカに渡り、チュニスとブージー、セウタを訪れて先述の教皇書簡を届けた後、マラケシュに到着して、この書簡をカリフに渡した。その内容は以下のようなものである。教皇は、モロッコ王（カリフ）が教会に多くの自由の特権を与え、彼の前任者同様に寛容を示して、教会を保護したことに感謝する。このことは王がさらにキリスト教徒をその領土に招こうとしていることを示しており、それは神の摂理の表れであり、これによって神は王をキリスト教へと招こうとしている。次に、前任者が呼び寄せたキリスト教徒の力によって敵が撃退され、勝利がもたらされたのだから、もし王が改宗したなら神はどれほどの保護を与えてくださるであろうか、と王に改宗を勧める。そして改宗するなら、王国は教皇庁の特別の保護下におかれ、また多くの人々が王に忠実に従うであろう、と言う。ここで言及されている勝利とは、先王

アッサイドがモロッコでの領域を回復した勝利を指していると考えられる。アル・ムルタダが即位したのは一二四八年であるので、書簡が書かれたときにはアッサイドがカリフであったが、届いたときにはアル・ムルタダに代わっていたのである。前任者が呼び寄せたキリスト教徒の兵士とは、先述のアル・マームーンがイベリア半島から呼び寄せた兵士たちのことである。

それから教皇は、キリスト教徒の兵士は手ごわい敵を撃ち破ったのだが、今後、敵の奇襲を警戒せねばならないので、そのような危険の対策がとられることを、王に要請する。すなわち、「あなたの領土内に、緊急時に先のキリスト教徒が避難できる、防備を施された区域や、（キリスト教徒の）身体や財産を守るために緊急の援軍とともに上陸できる港の避難所を、あなたの上級権を保持して、確保する」ように、と願う。それは王国の利益にもなる。なぜなら、そうすることによって、彼らはますます王国の拡大に貢献するであろうから。教皇の心配が根拠のないことではないことは、先述した一二三二年の事件が示している。少数派のキリスト教徒がこのような危険に会うことは、この時だけではなかったであろう。最後に、マラケシュ司教とフランチェスコ会士、さらに王国のキリスト教徒を受け入れることを求めて、書簡を終えている。

この書簡で、インノケンティウスはアル・ムルタダにキリスト教への改宗を勧めている。しかし、教皇はカリフにキリスト教徒の傭兵が必要であることを知っていないながら、改宗をキリスト教徒がカリフに仕えることと条件とはしていない。教皇は、カリフがキリスト教徒を保護してくれるなら、キリスト教徒が彼に仕えることを容認しており、改宗を条件とするグレゴリウス九世より柔軟な態度をとっていると言うことができよう。

では、アル・ムルタダは教皇の書簡にどのように答えたのであろうか。返書はまず、神の唯一性を強調し、三位一体を否定してイスラムの正当性を主張する。次に、教皇の書簡を受け取ったことを述べ、教皇に敬意を表し、完全な配慮を行うことを約束することによって、教皇との協調を表明している。そして、優れた人物の派遣を勧め、キリスト教徒の配慮に当たらせるよう提案する。この返書はキリスト教に対するイスラムの正当性を強調するが、全体的には友好的ということができよう。苦境にたっていたムワッヒド朝にとって、キリスト教徒の兵士は重要な支えであったからであろう。しかし、教皇が要請した避難所にはいっさい触れていない。カリフはキリスト教徒を完全には信頼しておらず、彼らの侵攻の拠点となりかねないものを提供するわけにはいかなかったためであろうか。

この返書をロベから受け取ったインノケンティウスは、一二五一年三月にアル・ムルタダに再び書簡を送っている^⑭。この書簡で教皇は、マラケシュ司教の報告によると、王がキリスト教徒に防備を施された区域を与えようとしていないことを非難する。そのため、キリスト教徒は危険にさらされ、従軍している間に妻子がサラセン人に襲われ、殺されたり、背教を強制されたりしている。それ故、再度、キリスト教徒に安全な区域を提供するよう要求する。「さもなければ、先の司教に私の書簡によって、その地方に暮らすキリスト教徒があなたに仕えないようにし、ほかの者がそこへ渡ることを禁じるよう命じるであろう」と圧力をかけている。そして、これに従わないキリスト教徒は、教会の譴責によって罰するとしている。

この書簡では、もはや教皇はカリフにキリスト教への改宗を勧めていない。先の返書でのきっぱりとしたカリフの態度から、改宗の可能性はないと判断したのであろう。このことから、インノケンティウスは、カリフが支配下のキリスト教徒を保護するならば、教皇とカリフとの間の一定の平和的關係を承認するつもりであった、と考えることができるであろう。

ロベはその後セビリアに留まり、マラケシュに渡ることはなかったようである。インノケンティウスはその四月にロベに書簡を

書き、もしモロッコ王が教皇の要請を受け入れずにキリスト教徒に防備区域を与えないなら、キリスト教徒が彼に仕えること、ほかのキリスト教徒がモロッコに渡ることを禁じるよう指示している。また、モロッコのキリスト教徒とそこに渡ろうとする者にも書簡を送って、同様の指示を伝えている。この指示が最終的に下されたかどうか、下されたとしてキリスト教徒がそれに従ったかどうかは明らかでない。

その後、ムワッヒド朝は滅亡への道をたどる。アル・ムルタダは遠縁のイドリース二世イブン・ムハンマド（アブー・ダブブー）によって一二六六年に殺され、イドリース二世はその三年後にマリーン朝にマラケシュを占領され、ムワッヒド朝は滅んだ。^⑩ムワッヒド朝の衰退は以前から始まっていたのであり、教皇の指示が実際に下されたとしても、それにどれほどの影響を与えたかはわからない。

インノケンティウス四世は、ムワッヒド朝がキリスト教徒を用いて勝利したことを祝福しているように、キリスト教徒がカリフに仕えることを承認していた。キリスト教徒が仕える条件としてカリフに要請されるのは、キリスト教への改宗ではなく、十分な保護、すなわち防備区域の設置のみである。防備区域の要請を受け入れないことに対しては、モロッコのキリスト教徒が彼に仕え

ることと、ほかのキリスト教徒がモロッコに渡ることを禁じるという措置で対処しようとした。彼は決して軍事行動をちらつかせて威嚇しようとはしなかった。ムワッヒド朝は当時衰退し、弱体化していた。他方、イベリア半島ではキリスト教徒側は優位にたち、一二四五年にはバレンシア征服が完了し、一二四八年にはセビリアを奪取していた。教皇自身も、一二五〇年に敵対していた神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世が死去したことにより、ある程度その地位を安定させていた。従って、ムワッヒド朝に対して、軍事的対応をおこそうとすることも可能であったと思われる。実際、インノケンティウスの後継者であるアレクサンデル四世は一二五五年に、グラナダ王国を支援するモロッコのマリーン朝に対して十字軍をおこすことをロベに許し、参加者に聖地に向かう者と同様の贈宥を与えることを認めている。^⑪またクレメンス四世も、一二六五年にタラゴナ大司教とバレンシア司教に、アフリカのサラセン人に対する十字軍の勧説を命じている。^⑫すなわち、軍事行動をとるようキリスト教徒に訴えることは十分に可能であった。インノケンティウス四世が軍事的対応をとろうとしなかったのは、アル・ムルタダがキリスト教徒を十分に保護しなかったことだけでは彼を攻撃する根拠とならないと考えたから、と言えるのではないだろうか。

では、先述の対異教徒理論とムワッヒド朝への対応は、どのような関係にあるのだろうか。メッローニは、この対応は融和政策と外交的必要性によるもので、教皇の異教徒に対する権力を主張する理論に基づくものではない、と考えている。^④しかし、彼は対ムワッヒド政策を具体的には考察しておらず、外交的必要性の内容も説明されていない。一二四五年以降に地中海に面する異教徒の脅威がもっとも弱まったため、教皇は融和政策をとったというが、この説明は説得的とは言いがたいであろう。メッローニは、理論は教皇の権力を強く主張するのに対し、政策は融和的であるとして、両者の乖離を主張するのである。これに対して、筆者は、教皇の理論をどう評価するかはさておいて、理論と政策の関係を検討するなら、マルドゥーンが主張しているように、教皇のムワッヒド朝への対応は、彼の理論と合致していると言うことができる、と考える。ムワッヒド朝のカリフは自らキリスト教徒を迫害することはなかった。従って、これに対する戦争が命じられることはなかった。しかし、カリフはその領土内のキリスト教徒が迫害される可能性があるにもかかわらず、教皇が要請した防備施設を提供しなかった。これに対してインノケンティウスは、キリスト教徒がカリフに従うこととモロッコに渡ることを禁じる措置をとったのである。このような非軍事的な対応は、異教徒の支配権

を正当とするインノケンティウスの理論に基づく対応ということができる。^⑤

では、理論と実践の時間的關係はどうであったのだろうか。マルドゥーンはインノケンティウスの著作が完成したのは一二五〇年以降と思われるので、対異教徒政策の実践の中から先のようない理論が生まれた、と考えた。^⑥しかし、この問題は検討の余地がある。まず、注釈書が一二五〇年以降に完成したことは、彼自身が一二五四年七月一日に発した教皇令「ウエネラビリス Venerabilibus」の注釈が含まれることから明かであるが、この著作は彼が教皇庁に入る以前から始まった長期にわたる仕事であったと思われる。^⑦では、異教徒との関係を述べている「クオド・スペル・ヒス」の注釈は、いつ書かれたのであるか。メッローニは、この注釈にグレゴリウス九世とインノケンティウス自身がユダヤ教の律法書『タルムード』に多くの異端が含まれているために、その焼却を命じたとの記述があることから、インノケンティウスがそれを命じた一二四八年以降と主張する。^⑧しかし、インノケンティウスはすでに一二四四年五月八日にも、大勅書「インピア・ユダエオルム Impia iudaeorum」でその焼却を命じている^⑨ので、書かれた時期は、メッローニの主張よりも遡り、一二四四年五月以降ということになる。またこの注釈では、聖地奪回の

正当性の根拠として、皇帝がエルサレム王であることを挙げてい^⑨る。皇帝とエルサレム王を兼ねたのは、フリードリヒ二世である。彼は一二二五年にエルサレム王の称号を獲得し、^⑩教皇庁はこれを一二三一年八月二日の書簡で承認している。^⑪インノケンティウス四世は一二四五年七月一七日にフリードリヒを廢位しているから、この注釈はそれ以前に書かれたことにならう。従って、「クオド・スペル・ヒス」の注釈は一二四四年五月八日から一二四五年七月一七日の間に書かれた、と考えることができる。インノケンティウスのムワッヒド朝への最初の書簡が一二四六年に書かれたものであるから、彼のムワッヒド朝に対する対応は、その理論を踏まえて行われたとすることができよう。

インノケンティウスの対異教徒関係の理論は、その後の教会法学に大きな影響を与えた。^⑫では、インノケンティウスの政策はその後の教皇により受け継がれたのであろうか。マルドゥーンは、以後の教皇は前任者たちが達成したレヴェルを保とうとしたと主張する。^⑬しかし、彼が平和的關係の根拠として挙げるのは、キリスト教徒の捕虜の解放が行われ、ニコラウス四世が捕虜の解放のために資金を要求したことであるが、これだけでは平和的關係と^⑭言うには不十分であろう。確かに、ニコラウス四世はマグリブのムスリム君主に仕えるキリスト教徒の傭兵に書簡を送り、新しい

マラケシュ司教としてロデリクスを承認するよう求めるとともに、キリスト教信仰を保ち、模範によってムスリムを真の信仰へと導くよう勸告している。^⑮しかし、先述のように北アフリカへの十字軍が提唱されることもあり、またインノケンティウス四世以降の教皇とマグリブのムスリム君主との間で交わされた書簡は一通も残っていない。従って、マルドゥーンの主張は根拠がない、と言わざるをえない。彼の態度はすぐには受け継がれなかった。十三世紀にはまだ、特殊な状況においてしかそのような態度はとれなかったのである。

教皇は、キリスト教世界外のキリスト教徒の安全と信仰にも、配慮せねばならない。キリスト教世界外においてそれを確保するには、その支配者の保護が必要である。そのためには、支配者をキリスト教に改宗させるか、さもなければその地の支配者との一定の平和的關係が必要となるのである。インノケンティウスは、後者を選択した。もちろん、彼にとってもムスリムとの共存は、決して理想の状態ではなかったであろう。到達すべき目標はやはり、ムスリムのキリスト教への改宗であった。彼はムスリム君主への書簡でキリスト教への改宗を説いている。しかし、それがそれほど容易でないことを、インノケンティウスはよくわかって^⑯いた。アル・ムルタダの返書は改宗が容易でないことを確認する。

これに対する教皇の返書では、もはや改宗は説かれていない。彼にとつてムスリムとの一定の平和的關係は、理想でないにしても、許容できる状態だったのである。インノケンティウスは、モロッコに在るキリスト教徒の司牧を確保し、安全に配慮するために、できる限りムワッヒド朝との良好な關係を保とうとしたのである。以上のように、インノケンティウス四世のムワッヒド朝に対する対応は、当時の特殊な状況とインノケンティウスの個性によつて生まれた、ユニークな対応と言つてできる。すなわち、衰へつつあるムワッヒド朝がスペインから退き、キリスト教世界に対してははや脅威とならず、またキリスト教徒の傭兵を必要としてゐるとかう状況のもとに、カリフの改宗は決して容易ではなからざるを認め、ムスリムの支配権を正当とし、これとの一定の平和的關係を承認する教皇によつて行われた対応であつたのである。しかし、この交渉に、教皇の異教徒に対する新しい態度の一つの現れをも認めることが出来るであらう。

- ① Simibaldus Filiscus, *Apparatus super quinque libros decretalium*, Frankfurt 1570, rep. 1968 (= *Apparatus*). インノケンティウス四世の『生活』 H. K. Mann, *Innocent IV. The Magnificent* (1243-1254), (*The Lives of the Popes in the Middle Ages*, vol. XIV), London 1928; A. Melloni, *Innocenzo IV. La concezione e l'esperanza della cristianità come regnum unius personae*, Genova

1990. 邦語文献としては拙稿「教皇インノケンティウス四世の政治理論における教皇権と世俗権」『史料』一九九四年。

② 拙稿「教皇インノケンティウス四世の対異教徒理論」『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』三三『一九九四年。

③ *Apparatus*, ad X 3. 34. 8; J. Muldoon, *op. cit.*, pp. 6-14. インノケンティウス四世以前の理論については P. Herde, 'Christians and Saracens at the Time of the Crusades: Some Comments of Contemporary Medieval Canonists', *Studia Gratiana* 12 (1967): H. Gilles, "Législation et doctrine canoniques sur les Saracens," in: *Islam et chrétiens du Midi* (XII^e-XIV^e s.), Toulouse 1983.

④ L. Mas Latric, *op. cit.*, pp. 12-13 XIII; A. Q. Prieto, *op. cit.*, pp. 251-252 n. 216. 同註簡訳版を『イスラームと十字軍』 J. Muldoon, *op. cit.*, p. 40.

⑤ Ibn Khaldoun, *op. cit.*, pp. 243-257; R. Le Tourneau, *op. cit.*, pp. 99-100.

⑥ E. Tisserant et G. Wiet, *op. cit.*, pp. 41-49.

⑦ A. Q. Prieto, *op. cit.*, pp. 335-354 nos. 318, 322, 323, 326, 328, 333, 344; A. Pothast, *op. cit.*, vol. II, nos 12307, 12318, 12333, 12336, 12376; E. Tisserant et G. Wiet, *op. cit.*, p. 46.

⑧ K. E. Lupprian, *op. cit.*, p. 24, pp. 176-178 Nr. 28-30; L. Mas Latric, *op. cit.*, p. 13 XIV; A. Q. Prieto, *op. cit.*, pp. 339-340 n. 325; A. Pothast, *op. cit.*, vol. II, n. 12327.

⑨ L. Mas Latric, *op. cit.*, pp. 14-15 XV; K. E. Lupprian, *op. cit.*, pp. 179-181 Nr. 31; A. Q. Prieto, *op. cit.*, pp. 344-346 n. 332; A. Pothast, *op. cit.*, vol. II, n. 12337.

⑩ E. Tisserant et G. Wiet, *op. cit.*, p. 44; K. E. Lupprian, *op.*

- cit.*, p. 25. トハキヤールニシテ Ibn Khaldoun, *op. cit.*, pp. 244-247; R. Le Tourneau, *op. cit.*, pp. 99-100.
- ① “.....quatenus aliqua loca munia terra tua, in quibus, necessitatis tempore, dicti Christiani se receptare valeant, et custodiam aliquorum portuum, per quos, si surgeret necessitas, et suaderet utilitas, valeret terram egredi et reintrare cum festinato subsidio pro defensione personarum et rerum, retento tibi principali dominio consignare procuret.” K. E. Lupprian, *op. cit.*, p. 181; A. Q. Prieto, *op. cit.*, p. 346; L. Mas Latrie, *op. cit.*, p. 15.
- ② P. Cenival, *op. cit.*, pp. 75-80.
- ③ E. Tisserant et G. Wiet, *op. cit.*, pp. 32-37. ユトユトニシテ 大ヤトニシテ ニシテ ニシテ K. E. Lupprian, *op. cit.*, pp. 199-203. ニシテ ニシテ
- ④ K. E. Lupprian, *op. cit.*, pp. 204-205 Nr. 37; L. Mas Latrie, *op. cit.*, pp. 16-17 XVII; A. Q. Prieto, *op. cit.*, p. 638 n. 712; A. Pothast, *op. cit.*, vol. II, n. 14245.
- ⑤ “ Alioquin memorato episcopo literis nostris iniungimus, ut Christianos in illis partibus degentes a tuo servitio revocare ac aliis ne illuc transeant inhibere procuret.” K. E. Lupprian, *op. cit.*, p. 205.
- ⑥ A. Q. Prieto, *op. cit.*, pp. 642-623 nos. 718, 719; A. Pothast, *op. cit.*, vol. II, n. 14246.
- ⑦ Ibn Khaldoun, *op. cit.*, pp. 247-257.
- ⑧ A. Pothast, *op. cit.*, vol. II, nos. 15855, 16065.
- ⑨ *Ibid.*, n. 19156.
- ⑩ A. Melloni, *op. cit.*, p. 187.

- ⑪ J. Muldoon, *op. cit.*, p. 41.
- ⑫ *Ibid.*, p. 46.
- ⑬ A. Melloni, *op. cit.*, pp. 17-18.
- ⑭ *Ibid.*, p. 194 n. 22.
- ⑮ J. Muldoon, *op. cit.*, pp. 30-31.
- ⑯ *Apparatus*, ad X 2. 2. 10.
- ⑰ T. C. Van Cleve, “The Crusade of Frederick II,” in: ed. by K. M. Setton, *A History of the Crusades II*, Madison 1969, p. 442.
- ⑱ C. Rodenberg, *op. cit.*, II, pp. 363-364 n. 540; A. Pothast, vol. I n. 8735.
- ⑲ J. Muldoon, *op. cit.* 前掲書籍「教皇ベネディクトゥス四世の対異教徒闘争」三五四—三六〇頁。
- ⑳ J. Muldoon, *op. cit.*, p. 41.
- ㉑ L. Mas Latrie, *op. cit.*, pp. 17-18 XVII; J. Muldoon, *op. cit.*, p. 54.

おわり

つむの十字軍の時代に属する十三世紀前半に、教皇は多少の継続的なトマヒド朝のカリンに書簡を送っていた。インケンティウス三世とホノリウス三世の時代にはトマヒド朝はキダイリア半島南部を支配しており、レモンキスタの対象であったので、教皇がこれと一定の平和的關係を結ぶことは有り得ず、ただ捕虜の解放やマグリブのキリスト教徒の礼拝の自由を、カリブに求めるだけであった。一二三〇年頃にトマヒド朝はイハリ

ア半島から退き、また内乱に対処するためにキリスト教徒の傭兵を必要とするようになる。グレゴリウス九世は、カリフをキリスト教に改宗させ、それによって、その支配下のキリスト教徒の司牧と安全を確保しようとする。しかし、そのような対応は、カリフにとって受け入れ難いものであった。

インノケンティウス四世は、改宗が現実的でないことをはっきりと認識していた。彼はムワッヒド朝のカリフ、アル・ムルタダの支配権を認め、これと一定の平和的關係を結ぶことによつて、キリスト教徒の司牧の確保と安全をはかろうとする。もちろん、彼にとつても最終目標はカリフの改宗であつたであらう。また、アル・ムルタダは教皇が要求する防備区域をキリスト教徒に提供することを拒否したため、インノケンティウスの対応は成功しなかつた。しかし、改宗を前提とせず、キリスト教徒保護のみを条件とする彼の対応は、ムスリム国家との共存も許容できる状態であることを示しているのである。

ヴォンシェは、一三世紀に布教精神の覚醒、十字軍の度重なる失敗、モンゴルのヨーロッパ侵入のために、キリスト教徒は外部の世界との關係を再検討し、異教徒に対する新しい戦略を立てようとした、と述べている。①ヴォンシェ自身は看過しているが、インノケンティウス四世の対ムワッヒド政策にその表れを認めることが

できよう。インノケンティウス四世は教皇庁の対異教徒政策に重大な画期をなした教皇であつた。彼は、モンゴル人に初めて使者を派遣し、その後の交渉のきっかけをつくつた。②また、彼が一二四八年にアラビア語などの東方の言語を学ぶ若い学生のための基金をバリア大学に設立し、③翌年に一〇人の学生を同大学に送ることを決意した④のも、布教のためであるとともに、異教徒との交渉を重視したためであらう。

本稿では、一三世紀前半における教皇のムワッヒド朝に対する態度を検討した。しかし、この時期に教皇が書簡を交換したイスラム王朝はムワッヒド朝だけではない。アイニューブ朝やルーム・セルジューク朝などの君主との間で交わされた書簡も小教ながら残っている。教皇のイスラム世界に対する対応を考察するには、これらの君主との交渉も検討せねばならない。アイニューブ朝との關係においては聖地の問題や、アイニューブ朝内部の対立などが、ルーム・セルジューク朝との關係においては対アイニューブ朝同盟や、モンゴルの侵攻に対する援助要請も絡んで、さらに複雑な様相を呈している。これらの王朝との關係については、ほとんど手つかずの状態であり、⑤困難が予想されるが、今後の課題として筆を置きたい。

① A. Vauchez, *op. cit.*, p. 701.

- ㊦ イソノケンヂヤウモ四神のキソコナノノ使節使節ジツムラサキ 30ノ
 421ノ I. de Rachewiltz, *Papal Envoys to the Great Khans*,
 Stanford 1971; Ch. Dawson, *Mission to Asia*, Toronto 1980.
- ㊧ J. Richard, "L'enseignement des langues orientales en Oc-
 cident au Moyen-Age," in : *Croisés, missionnaires et voyageurs*,

(Variorum Reprints) London 1983, XVIII. p. 158.

㊨ A. Vaucher, *op. cit.*, p. 727.

㊩ K.E. Luppurian, *op. cit.*, p. 11.

(聖西大外務省文書館蔵)